

京都でへき地教育研究大会

分科会で京都市立花背小・宇治市立笠取小を訪問

第67回全国へき地教育研究大会(文部科学省、京都府教委、全国へき地教育研究連盟など主催)が10月11、12の両日、京都府で開かれました。全国のへき地校や小規模校、複式学級のある学校の教師ら約900人が参加。「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」をテーマに、初日は基調報告や記念講演などがあり、2日目は府内9校で公開授業がありました。来年の大会は長野県で開かれます。



地元のモノを教材に 京都市立花背小中学校(片山雅斗校長、児童生徒数34人)の公開授業には、約100人の教育関係者が訪れました。市の中心部から車で北へ約2時間。山に囲まれた地元の特徴的な自然やモノ、人物などを「花背教材」と名付け、各科目で活用するユニークな研究授業を見学しました。

同校の子どもたちは少人数のため、話し合いを深めたり、筋道立てて説明したりすることが苦手だったそうです。この研究授業は、そうしたことを克服しようと、昨年度から続けられています。

たとえば、6年生の国語では、4人の児童が花背の良さを伝えるパンフレット作りに取り組んでいます。この日は互いにパンフレットの下書きを読み合い、より良いものに仕上げるにはどうすればいいかを話し合いました。同じく6年生の算数では、日本一とされる「花背の三本杉」の高さを題材に、縮図を使って計算する方法をみんなで考えました。

体育館で開かれた締めくくりの分科会では、児童全員でつくる「花背小中学校わくわくバンド」が「となりのトトロ」などを演奏して歓迎し、大きな拍手を受けました。



19分の16 宇治市立笠取小学校の全校児童は19人。うち16人が学区外の市街地からスクールバスで高速道路を経由して通学しています。小学校があるのは、宇治市の北東部の山間の集落で、過疎化が進む地域。なぜ、宇治の市街地からわざわざ子どもたちが通ってくるのでしょうか。

笠取小は2001年度から京都府内で初めて「小規模特認校制度」を導入し、学区外の児童を受け入れ始めました。前年度、全校児童が6人にまで減少し、学校の存続が危ぶまれたからです。「地元の学校を守りたい」と地域の人たちが教育委員会に働きかけて実現しました。

「ふるさとが教科書になり、教材になる」がコンセプト。清流の川辺にはシロツメクサが密生し、森に入ればアケビが実をつけています。子どもたちは探検を通じて探求心を育み、深い気づきを得ていきます。地域の方々が全面協力していることも特徴で、田植え、草抜き、稲刈り、しめ縄作り、タケノコ掘り、干し柿づくり、餅つき、乗馬、伝統工芸の陶芸など、貴重な体験の機会を数多く提供してもらっています。祭り太鼓にも取り組み、毎年秋に地域の皆さんに練習の成果を披露しています。

こうした特色ある教育内容が評判となり、学区外からの入学希望者が急増しました。教室が狭いこともあり、抽選で人数を制限しなければならない年も出てきました。また、市立小学校なので、学区外といっても宇治市内居住が条件です。「お子さんを笠取小に通わせるために、京都市内や大阪府内から家族で宇治市内に転居したというご家庭もあります」と角田泰志校長は言います。そうした意識の高いご家庭にとって、いま、山間の学校が注目の的になっているのです。



(上) 全国へき地教育研究大会の開会式



(中) 地元の良さを伝えるパンフレット作りに取り組む花背小6年生の授業
(下) 笠取小3、4年制の「総合学習」。昆虫の擬態について、積極的な発言が相次ぐ



分厚い「引継帳」受け継いで／積み重なって大きく、を実感

静岡市立葵小学校／800万点

7月に800万点を達成したのは、ちょっとおもしろい立地にある学校です。静岡市立葵小学校(山田欣也校長、児童626人)の校門前から見えるのは、なんとお堀。駿府城公園を囲む二ノ丸堀と外堀のあいだにあるからです。

作業日に、環境教育委員の61人の皆さんが集まりました。各クラスに1人「正委員」がいて、児童からのベルマーク回収や事前仕分け、連絡役をします。袋の回収は年5回。作業日は年2回で、働いている方も参加しやすいよういずれも土曜日です。

財団がまだ教育設備助成会という名だった1985年に発行した「ベルマーク運動引継帳」を使っています。全てはその分厚い引継帳にある



そうで、「代々引き継いでいたら800万点を達成したようです」と委員長の鈴木多恵子さんは話しました。

集計は、事前に会社ごとに分けたマークを、ひたすら10枚ずつにまとめます。ホチキスで綴じるか、テープに貼りつけるかは自由。あちこちに動いている様子がないかを気にかける鈴木さん、実は環境教育委員になるのは上の子

の時と合わせて6年目になる大ベテランです。お買いもの額の1割が支援につながることを理解してくださっています。

皆さんからは「話しながらなので意外と楽しい」「こういう作業、嫌いじゃないです」「活動が土曜だから選びました」「転校生ですが、ベルマークなら学校が違ってやりやすいと思って選びました」という声が聞かれました。

最後は、鈴木さんと副委員長長の岩崎絵美さん、館林利依子さん、鈴木麻記さん、瀧昇子さんが残り、最終チェックと送り状の記入をしました。

最近には主にボール類や一輪車を購入し続け、預金を有効利用している葵小。商品は全校集会で先生が紹介します。

財団にはもう1冊もない「引継帳」を使い、土曜日に活動するという工夫。そんなふうに参加してくださっていることに感動した取材でした。



さいたま市立三橋小学校／800万点

さいたま市大宮区の中心部にあり、来年創立130周年を迎える市立三橋小学校は、児童数1140人のマンモス校。4月にベルマーク累計点数が800万点を超えました。1962年から運動に参加。この7年間で100万点積み上げました。



各クラス1人、計35人によるPTA総務委員会ベルマーク班と、5～6年生約30人で構成する助け合い委員会が運動を担います。月1度のベルマーク週間に子どもたちが封筒にマークを入れて持ち寄り、委員会の児童らが回収。それをPTAベルマーク班が2～3カ月に1度集まって仕分け・集計します。ボランティアの手伝いも毎回募集します。学区内の郵便局やスーパーなど6カ所にも回収箱を置いています。

800万点達成について、PTA副会長(ベルマーク担当)の増川裕美さんは、「集め

ようという意識が児童や各家庭に浸透していることが大きいのでは」と言います。とくに子どもたちは、マーク提出の際にシールを貼ってもらうのがうれしくて熱心に集めているようです。一方で、課題はむし分け・集計の効率化と負担の軽減。家庭である程度仕分けしてもらう試みを始めたほか、ボランティアを増やすことなども検討しています。

増川さんは「みんなが持ち寄るささやかな点数が積み重なって大きなものになっている。そんなことを実感します」。さらに「へき地や被災地の学校の役にも立っていることを、もっと伝えていきたい。それを知れば、活動の励みになるはず」と言います。

今年は3年間貯めたベルマーク預金で大判の紙に印字できるプリンターを購入します。浅野博一教頭は「視覚に訴え、子どもたちの集中力を高めることが期待できる。高価な機材なので、とても助かります」と話しています。

